

私が通っていた小学校は修学旅行の代わりに「5泊6日の長期宿泊学習」がありました。自然の中で集団生活を送る。今思えばとても貴重な経験です。中でも強く印象に残っているのは、帰りの荷物なことでした。

⑥7 自立



いているはずなのに衣類はふくらみ、どう工夫してもしつかり畳んでびたりとカバンに入れてくれた母親のようにはいきません。

結局、はみ出した荷物を手に持って帰宅することになりました。

「入らなかった」と、半ば愚痴のようには伝えた私は、どこかで母親のせいにしていました。すると母親は少し厳しい表情で、準備の段階での私の行動を思い返すよう諭しました。その時に初めて、着替

えに関しては母親に任せ、何も考えていなかった自分に気づかされたのです。長期宿泊学習を終え、少し大人になったつもりでしたが、実際にはまだまだ子どものままでした。



話は変わりますが、私が教師になりたての頃、テレビや雑誌で気

になる記事を目にしました。「子どもの宿題を代わりに行ったり、友達関係に過度に関与したりする保護者がいる」という内容です。さすがに私の周りにはそうした事例は多くありませんでしたが、決して特別な話ではなく、実際に起こり得ることだと感じました。

過保護は家庭の問題と思われるがちですが、学校現場でも起こり得ます。教師による過剰な配慮も、

時に過保護になります。極端な例を考えてみましょう。子どもは朝、親に起こされ、学校の準備は前夜にすべて整えられています。忘れ物の心配もありません。学校では先生が丁寧に宿題を集め、指示を聞き逃してもすぐに教えてくれます。失敗する前に、すべてが用意された環境です。

こうして育った子どもは、うまくいっている間は困りません。しかし、ひとたびつまづいたとき、「自分が悪かった」と考えるでしょう。むしろ不満や怒りは「あなたたちのせいであつた」と周囲の大人に向かうはず。自

分で責任を負う経験をしていないからです。

私は18歳で家を出ました。吉本新喜劇に入団するため、大学を休学しての挑戦でした。苦労も失敗も山ほどありましたが、振り返れば、そこには楽しさもありました。自分で考えることが面白くなり、失敗をどう乗り越えるか、人生をどう転がすかを工夫するようになったのです。学びとは本来、つらさの中に楽しさを見いだすことに大きな意味があります。そして、人生を楽しく生きることそのものが、エデュテイメントなのだと思います。